

月例研究発表要旨

第 212 回 2002 年 11 月 27 日

「戦争と演劇」

——アイスキュロス、シェイクスピア、ジュネ」

鵜飼 哲

アイスキュロスの『ペルサイ（ペルシャ人）』、シェイクスピアの『ヘンリー四世、第一部』、ジャン・ジュネの『屏風』、この3作は2000年—2001年度のフランスの高等教育教授資格試験文学部門の課題作品となった。「戦争と演劇」というタイトルのもとでのこの3作の選択は少なくとも以下の3つの問いをただちに提起する。第1に、ジャン・ジュネの『屏風』のようにフランスの植民地戦争を批判的に扱いかつて激しい賛否の渦を巻き起こした作品をフランスの文学制度はどのように伝統のうちに組み込もうとしているのか。第2に、『ペルサイ』はエドワード・サイードによって西洋の文学的オリエンタリズムの最初の作品とみなされているが、この3作の選択がヨーロッパ文学史の書き直しの試みであるとすればオリエンタリズムの問題はそこでどのように位置づけられているのか。第3に、戦争の演劇的表象の問いをこの選択はどのように方向づけようとしているのか。『ペルサイ』が扱う紀元前5世紀の「侵略的バルバロイ」に対する「民主的ギリシャ」の防衛戦争は、しかし、終始敵側のペルシャを舞台とし、他者である敗者の立場から描かれている。この作品は哀悼の場としての

悲劇の典型的な事例であり、王妃アトッサが嘆きに沈む女ではなく現実感覚ゆたかな母として描かれている点に「没落するアジア」（サイード）という規定にとどまらない特異な性格が現れている。14世紀イギリスの内戦を扱った『ヘンリー四世、第一部』はうって変わって男中心の戯曲であり、道化フォールスタッフが没落する〈父〉の代理となる点にシェイクスピアの特異な戦争観が集中的に現れている。そして20世紀のフランス植民地支配に対するアラブ人のゲリラ戦争を扱った『屏風』は圧倒的に女たちの支配下にあり、男たちの間の戦争の裏面が売春宿を舞台に暴き出される。戦争はそこでその本質的な「倒錯」性において分析され、敵味方いずれの側においても「戦争目的」がまっすぐ実現されることはけっしてない。結論としてこの3作は、戦争が当事者や勝者でさえも意図や表象を逃れる非人間的な存在であり、そのようなものとして尽きざる思考を呼び求めることをそれぞれに表している。また、人間にとっての戦争の意味は性差の問いと不可分であることが強調されている。ヨーロッパ文学史がこのような姿勢から書き直されていけば、文学的オリエンタリズムの克服に向けた確実な前進が期待できるだろう。

第 213 回 2002 年 12 月 18 日

「現実と虚構のはざま

——ミュリエル・スパークの

小説を読む」

中上玲子

1957 年に第一作目の小説『慰める人々』(The Comforters) で世に出てから、ミュリエル・スパーク (1918-) は二十一の小説を出版している。初めは詩人を目指していたが、ある短編小説コンテストで優勝し、作家になる。プロテスタントの母とユダヤ系の父を持ち、プロテスタントからカトリックへと改宗し、後に離婚した夫とともにアフリカにも暮らしたスパークは、自らを「生まれながらの流浪者」と呼ぶが、この無帰属性もしくは無国籍性は小説に強く現れている。作家としての関心は、特定の時代や土地、もしくは政治的問題よりも、人間の生活におけるもっと普遍的かつ根本的な問題に向けられているように思われる。

デビュー作『慰める人々』の主人公キャロラインは、当時の作者と同じくカトリックに改宗したばかりの作家の卵だが、ある日とつぜんタイプライターの音と目に見えない語り手の声が聞こえるようになる。彼女は自分が誰かの小説の中の登場人物に過ぎないのだと悟り、作者の権力に抗おうとする。結末では『慰める人々』自体がキャロラインの手になる自伝的小説だったことが明らかになる。「小説を書くことについての小説」ともいえるこのメタフィクションに限らず、荒唐無稽なプロットと奇妙で平板な人物たちに特徴づけられるスパークの作品は、その平明な文体と裏腹に大変難

解である。これはおおむね、スパークの作品が、それまでの小説が実践してきたタイプのミメシスをことごとく放棄しているせいである。このせいで彼女はしばしば、カトリック信者以外の読者には理解不能だとか、来世だけを信じていて現世には何の関心もない、冷淡な作家だというような外的な批判を受けてきた。しかしこれは皮相的な見方に過ぎない。『慰める人々』でスパークが目的としたのは、既存の小説ジャンルに対してのアンチテーゼを打ち出すことであり、それは同時に「人間の現実とは何か」を問い直す試みでもあるのだ。

『ミス・ブロディーの青春』は、後に映画や舞台にもなった有名な作品である。30年代から50年代にかけてのエジンバラを舞台に、カリスマ的で独裁者の女子校教師ミス・ブロディーとその六人の「愛弟子」たる女生徒たちを描いたこの作品は、自伝的な色合いが濃いと言われる。だがここでもやはり、スパークは従来の小説と同じレベルでの「読者の共感」を求めている。

この小説の三人称の「全知」の語り手は、少女たちの成長を時系列に沿って追っているのではなく、いわゆる時間移動を連続して行っているため、読者が物語を筋道立てて理解するのは難しい。ジュネットは物語時間と語りの時間を区別しているが、スパークの作品では、この二つの関係は途方もなく複雑である。しかし、いわば出来事の時系列的つながりである物語時間と、出来事の因果的つながりである語りの時間の関係を探ることで初めて、小説の意味が理解できる。冒頭ではブロディー先生の六人の愛弟子は高校生だが、話は急に過去にさかのぼり、彼女たちはまだ小学校の新入生と

なる。そうかと思えば、話はずっと先に飛んで、既に中年になった彼女たちが、亡くなったブロディー先生について思い出話を交わしている。そのうち、小説はひとつの物語というよりも、バラバラなエピソードのランダムな寄せ集めのように見えてくる。また、読者が物語内の時間の流れと自分の読書行為における時間の流れを混同してしまうという奇妙な現象が起こる。すなわち現実と虚構の境目を見失うわけだが、これこそ、スパークがその巧妙な語りの仕掛けを通じて読者に与えようとしている効果に他ならない。

この小説は、表向きは三人称の全知の語り手によって語られているという体裁をとっているが、実はすべてのエピソードはひとりの人物の記憶にもとづいて語られ、彼女の視点によって束ねられている。その人物とはブロディー先生の最も忠実な生徒であり、また先生を破滅に追いやった張本人でもあるサンディーである。しかしこれに気づいたとき読者が体験するのは、サンディーや先生に対する個人的な共感というようなものではない。それは、人生とは決して一つの筋道だった物語などではないということ、人生の一瞬一瞬において、人は「可能体としての過去」を無数に生み出しているのだという認識である。過去は私たちの眼前に存在せず、想像の中でいくらでも書き替えられるという点で、未来と何も変わらない。サンディーたちとミス・ブロディーの物語は、この小説というテキストに記録されている以外の、どのような形でもあり得たのである。つまり、『ミス・ブロディーの青春』という小説は、サンディーの悔恨の物語であると同時に、裏を返せば、彼女の、そしてブロディーや友人たち

の、無数の「語られない物語」の集積なのである。

スパークの最新作 *Aiding and Abetting* (2000) は、1974年に自宅の地下室で子供の乳母を惨殺し、逃亡して以来ゆくえ知れずになっているルーカン伯爵という実在の人物を題材にしている。だがこの小説は、「作者が想像するルーカン卿のその後の人生」などという単純なものではない。パリの女性精神科医ヒルデガルドの元に、自らルーカン卿と名乗る男が二人はば同時に現れる。どちらかが本物で、どちらかは偽物の詐欺師に違いないとヒルデガルドは思うが、彼女自身にも実は怪しい過去がある。若い頃は詐欺で貧乏人からお金を騙し取っていたが、やがて国外に逃亡し、名前を変えて精神科医になりすましたのだ。彼女の勘は正しく、二人のルーカンの片方は本物であることが判明するが、実は彼らはぐるで、ヒルデガルドの過去をネタに彼女をゆすろうとしていた……。などと粗筋を正確に述べたところで、あまり意味はない。それよりも重要なのは、この小説もまた、現実と虚構をへだてる境界を消滅させる方向に向かっていくということだ。

実在のルーカンと虚構のルーカン、影武者のルーカン、詐欺師ヒルデガルド。誰の物語が真の物語で、誰の物語が「物騙り」なのか——本物と偽物、本当と嘘、現実と虚構とを区別しようとする読者の努力は、次第に空しいものになる。そうするうちに読者は、結局、現実と虚構とは、メビウスの輪の両面のようなものではないかと思いつた。私たち常日頃から、このようにして一つの「本当の」物語を、おびただしい数の「嘘の」物語から選り分けようと躍起になってはいまいか。しかしいくら努力し

たところで、その「本当の」物語の陰の無数の流れから完全に目をそむけることはできない。私たちはほとんど本能的に現実と虚構を区別したいと願う。しかしそれが究極的には不可能であり、それこそが私たちが生きていく上で、ひとつの大きな苦しみとなっている。「あの時、ああしていれば」といった仮定法の世界のビジョンに悩まされない人間はいない。個人の歴史も集団の歴史も、決してひとつながりの糸などではない。「こうもありえたのだ」という無数の可能体としての過去を共通の痛みとして受け止めること、そして物語を紡いでは壊したがるという人間の本能と向き合い、その危険性と可能性の両方を認識することが必要なのだ。スパークは現実を模倣する小説ではなく、人間にそのような人生の現実と直接向き合わせるための、いわばショック療法的、もしくは触媒的な小説を書くようとしてきたのではないだろうか。

第 214 回 2003 年 2 月 19 日
「ハイブリッド文化をめぐって
——『悪魔の詩』再考——」

中井亜佐子

本発表では、今日の英語圏の文化理論におけるキーワードの一つである「ハイブリッド性」(hybridity)をめぐり、問題系を次の二点、①現代のイデオロギーとしてのハイブリッド概念の問題(ハイブリッドという概念が多文化主義、文化本質主義とどのように関わるのか)、②ハイブリッド文化の表象(representation)の問題(ハイブリッド文化が作者性を請け負うテキストによって表象／代表されるときにどのような問

題が生じるのか)にわけて考察した。

①に関しては、まずこの概念の歴史の変遷を概観した。英語の hybrid (雑種性、異種混交性)は 19 世紀の生物学、人種理論などを通じて発展してきた概念であり、もともとは一つの個体に異なる種が共存する状態を表し、起源としての純粋種の存在、文化と「人種」の相互互換性を前提としていた。一方、獲得形質としての文化と本質論的「人種」を区別することは、フランツ・ポアズ以降の文化人類学の出発点である。1980 年代以降の文化理論では、ハイブリッド性という概念は可能な限り脱人種化され、パフチンを経由して言語・文化の議論に流用されてきた。ポストコロニアル社会、特に旧植民地宗主国における移民のハイブリッドな文化が、単一の人種・民族アイデンティティに依拠するのではない第三の立場として積極的に捉えなおされることで、民族アイデンティティを本質化、固定化する傾向にある単純な多文化主義とは異なる考え方が文化理論の場を導入された。

今日のハイブリッド文化論の多くは全ての文化が最初からハイブリッドであるという認識を共有しているが、19 世紀的な「純血」対「雑種」という発想を完全に排除するのは難しく、ハイブリッド文化は多文化主義同様、結局は人種／文化本質主義にすぎないという批判もある。しかしながら、文化が「人種」概念と密接に結びつけられ、諸文化がいまだ理想的な平等性も互換性も獲得していない社会では、人種本質主義を逆手にとって抵抗の武器とするという戦略は、その有効性を失っていない。その成功した例として、「人種」を再び独立した変数として立て、大西洋を往来するハイブリッドな「黒人文化」を想定することで、国

民国家の枠に縛られない文化研究の可能性を提示するポール・ギルロイの「ブラック・アトランティック」という概念が挙げられる。

②の議論においては、サルマン・ラシュディ (Salman Rushdie, 1947-) の『悪魔の詩』(The Satanic Verses, 1988) とその受容をめぐる「ラシュディ事件」を中心に論じた。80年代英国文壇の寵児であり、サッチャーリズムの対抗言説を担う存在だったラシュディは、『悪魔の詩』においても意識的にハイブリッド性をテーマ化している。不法入国を疑われて警官の暴行を受け、「山羊人間」に変身させられるサラディン・チャムチャの物語は、英国の人種主義への痛烈な批判となっている。にもかかわらず、ブラッドフォードでの焚書デモにはじまりホメイニ師による死刑宣告後過激化した「ラシュディ事件」によって、ラシュディという一知識人が代弁、代表していたと考えられていた人々が、実際には全く違う方向を向き、全く異なるものを求めているという事実が明らかになった。

ラシュディ・バッシングに加わったイスラム教徒の大部分は『悪魔の詩』全編を読むことなく、問題とされる箇所の抜粋や要旨の形でこのテキストに接していた。ポストコロニアル批評家の多くは、「ラシュディ事件」を反イスラム宣伝に利用する人々を批判する一方で、『悪魔の詩』をきちんと読めば、実はイスラム批判を目的としたものではないことがわかると指摘する。このような「精読のすすめ」は、実はテキスト中に既書き込まれてもいる。イスラム教

冒瀆が疑われるジブリール・ファリシュタの夢物語の部分は、言説のハイブリッド化をテーマとしたメタフィクションであり、複数の「作者」の表象は作者性を解体する身ぶりとともに「真の作者」を執拗に探求することを要求している。結局『悪魔の詩』というテキストが求めているのは、テレビのチャンネルを次々に切りかえるようなポストモダン／大衆読者ではなく、複数の声を装うテキストに単一の起源としての「作者」を再構築することのできるモダニスト文学の(エリート)読者である。そのような読み方によってはじめて、「移民」と「第三世界」の物語は単一のポストコロニアルな物語に回収される。その意味で、ポストコロニアル批評は『悪魔の詩』と共犯関係にある。

ガヤトリ・スピヴァクは、『悪魔の詩』をめぐる言説の中で「西洋」対「イスラム」、「表現の自由」対「テロリズム」という二項対立が構成されていくプロセスを検討し、そのような二分法的世界観において排除される他者の物語にこそ目を向けるべきだと論じる。一知識人によるハイブリッド文化の表象が、あるコンテキストに限定すれば有効な抵抗の武器となることを否定する必要はないが、その同じ「文化」が別のコンテキストでは抑圧的なものとなりうることも、『悪魔の詩』を読まずに焼き捨てた人々の存在を通じて認めなくてはならない事実である。いうまでもなく、「ラシュディ事件」を特権化し「文明の衝突」の単純な二分法で世界を語ることは、絶対に避けられなくてはならない。